原始的繪畫を有する彌生式土器について

森本六爾

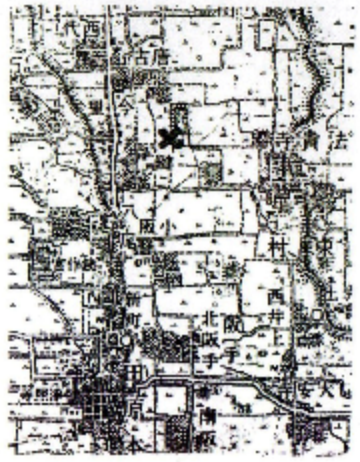
一

順序として、私は先づ資料の解說から溯入らう。尤もこれは、梅原末治氏が本誌及び人類學雜誌上に於いて(1)いちはやく紹介されたものであるが、遺物それ自らの觀察に、小許の誤を存してゐて、これによつて、考說を立てるのは、甚だ危險であるから、此の際記述を新しくするのも必しも不必要でなからうと思ふ。

さて、大和磯城郡川東村唐古、韓人池附近の遺跡(第一圖)は、同高市郡新澤村一東常門(2)、山邊郡二階堂村岩室(3)、北葛城郡盤城村竹之內(4)、添上郡帶解村廣大寺池(5)、磯城郡三輪町金屋志貴宮附近(6)、吉野郡大淀町下淵(7)などゝ共に大和に於ける重要な石器時代遺跡であつて、既に古く高橋先生が學界に紹介せられてから(8)、大正六年八月には鳥居博士一行の發掘調査を見(9)、近くまた梅原末治氏の報告が人類學雜誌上に掲載せられてゐる(10)。

第一圖

唐古遺跡附近地圖

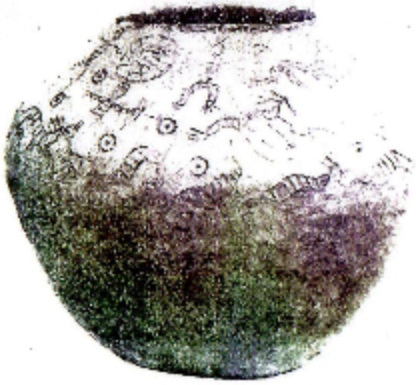


所が恰度、今年三月の十、十一の兩日、高田高等女學校で上古遺物展覽會を催すことになつて、出品の遺物蒐集のため同地の熱心な採集家飯田松治郎君を訪ねて御出品を願つた際、偶然にも私の注意に上り、遂に同君からの惠與を得て、私の珍藏する所となつた彌生式土器の一片がある。其は現今只、長さ三寸三分、幅最も廣い所で二寸八厘、厚さまた二分九厘ある、甚だ緻密な、褐色の、面にやゝ滑澤ある一小片にすぎないが、壺形土器の肩部であつたらしく、其の緩やかな彎曲面から現存部を復原すると上部の徑が八寸六分、下部の徑が一尺四分五厘となつて、完形では腹部の最大徑が少くとも一尺一寸を下らない隨分大形の土器であつたことが知られる。珍しいことには、この破片に寫眞や拓本(第二圖)で示したが樣な精細な製作的刷毛目の上に筆書にした動物の形があつて、今日では、日本での最古の自由繪畫、若しくは其の一つとして明かな價値を有してゐる。其の上、此の動物は、一見直ちに鹿とみとめることが

第二圖

大和唐古發見繪畫彌生式土器片拓本

第三圖

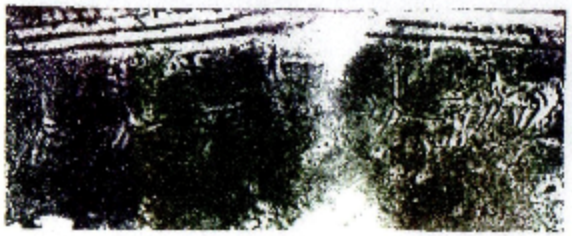


（京大考古圖錄による）

できる位に、明確に且つ正確に特徴をあらはしてゐることに於いて一段と興味が深い。いまこれら原始的繪畫を有する土器の類例を、私の狹い知見から求めるならば、日本に於ては、朝鮮慶尙北道慶州皇南里古墳發見陶壺（第三圖）[11]、同慶尙南道昌寧出土の高坏[12]、朝鮮（慶州？）出土伊藤藤太郎氏藏脚付坩[13]、の三例を數へることができる。そして、これらが全部朝鮮出土であり恐らくは古新羅の時代に屬するものであるに反して、本土器が內地に於ける唯一例であり、石器時代の文化所產であることに於いて、甚だ重要視すべきものであることを覺える。

第四圖

河內恩智發見銅鐸拓本一部



（考古圖集第十九集による）

いさゝか想像に走ることであるが、これはかの慶州や昌寧から發見された土器などに見るが樣な狩獵者が動物群に對してゐる現實的な光景をあらはしたものゝ一部分であつたかも知れない。若し夫でないとしてもかの河內恩智（第四圖）[14]、但馬氣比[15]、和泉神於[16]等發見の銅鐸の樣に狩獵生活を反映するところの著しい鹿の一群をあらはして居つたことに違ひない。其はこの一小片にすぎなくなつた現在でも、なほ全部で三匹（決して二匹でない）の鹿を留めてゐるといふ事實が明にこれを語つてゐる。卽ち、こゝに描かれてゐる鹿は、狩獵に於ける主要な對象として彼等が日常特殊の關心を拂つて止まなかつた鹿をあらはすものであり、而も其が同一方向をとつて左に進んでゐるのは、作者の右利き[17]であることを示すと共に彼等の記憶に最も著しくあらはれるところの動物の橫向が撰ばれた[18]意味に於いてことに興味をひく。

此の三個のうち中央のものが頭部を少しく缺いてゐるばかりで殆ど完形に近いのに反して、他の二つは缺乏してゐる所が多い。卽ち上部にあるものは頸から以下を留めないし、下の一個また肩や背の部分を示す線と其の體の立體的な感じをあらはすために用ひた原始的な手法としての格子紋[19]の一部分がのこされてゐる外、すべて失はれてゐるのは甚だ遺憾である。しかし上下の二個が中央の鹿に比して大きく描かれてゐたであらうとは、すぐ想像されるし、上の二個と共に恐らくは下部の一も牝鹿であつたであらう。もし其れ、中央の一個をもつて仔鹿であらうとなし、後をふり返つて見てゐるとなすが如きに至つては、あまりにうがちすぎた不當なアナロヂーといはなければならない。此等の描かれた鹿が前にも一言したがように頭を左にした橫向であるのは、延びるにまかせた枝のような角や異樣に長い頸、格子紋の施されてゐる體、たど〳〵しく箟を行つた細い脚などゝ共に、深く私達の注意をひく所であるが、さらにこれをかの銅鐸の繪と對比する時、其處に當然巧拙の差をみとめなければならないとしても、其の描寫や其の手法に於いて甚だ相類同してゐる事實を否定することができない。これは銅鐸を使用した民衆を考へる上にも、示唆される所必しも尠くないであらう。かつて高橋先生が本誌五の五でしるされた上野國群馬郡瀧川町大字八幡原古墳出土狩獵鏡などゝ共に、いづれ稿をあらためて此の問題にふれることゝしたい。

また、此の土器片が甚だ緻密厚手であつて、全面精細な製作的刷毛目を施されながらなほやゝ滑澤であり、且つ完形に於ては腹部の最大徑恐らくは一尺一寸以上に及ぶ大形であるが上に珍しく動物の繪の存してゐて、粗末な他の多くの彌生式土器と甚しく類を異にしてゐることは、其の用途のより特殊的であることをあらはすものでなければならない。かつて濱田博士は支那三代の土器を論じて(28)奢侈式(Herrensitte)と農民式(Bauernsitte)との併存をとかれたことであるが、私は日本の石器時代の一點に於ても、より原始的な意味に於いて、土器に奢侈式の精品と農民式の粗品との二型式が同時に存在して居つたのであらうと考へたい。かの薩摩國揖宿郡指宿町などから發見された彌生式系統の土器中に其の質料手法形色等の方面から見て、確に二つの區別の存する(31)ことは、この考に有力な證據をあたへるものである。しかし、今はたゞ可能性ある大膽な一臆說として、此の三種類の土器の併存を認め、本土器片をもつて奢侈式の精品の一に屬するものとして學界に呈出するにとゞめよう。

註

1、梅原末治氏「彌生式土器に鹿の圖」(本誌十三ノ九)「再び大和唐古の遺跡に就て」(人類學雜誌三八ノ三)
2、高橋先生「高市郡新澤村大字一石器時代遺跡」(奈良縣史蹟勝地調査會報告書五)其他。
3、佐藤小吉氏「山邊郡二階堂村大字平等坊石器遺跡」(奈良縣史蹟勝地調査會報告書六)。
4、岩井武俊氏「石器時代遺跡調査」(大阪毎日新聞大正六年八月)。
5、小泉顯夫君「帶解村廣大寺池の彌生式土器遺跡について」(大和考古學會報一)。
6、本遺跡に關しては未だ詳細な報告を見ない。僅に大野雷外氏の旅行中見聞の一項人類學雜誌二七五號に掲載された位である。

7、細矯「大和大淀町の石器時代遺跡」(歷史と地理十一ノ六)。
8、高橋先生「大和考古雜錄」(考古界一ノ七)。
9、未だ其の精密な報告は發表されるに至らないが、當時同行せられた岩井武俊氏「石器時代遺跡調査」(前出)中少しく記述せられて居つて、其の概要を覗ふに難くはない。
10、梅原末治氏「大和唐古の石器時代遺跡について」(人類學雜誌三三ノ八)「再び大和唐古の遺跡について」(前出)。
11、京都大學所藏。濱田博士「原始的繪畫と裝飾」(旬刊朝日。大正十一年三月五日)及び「京都帝國大學文學部陳列館考古圖錄」第四六。
12、朝鮮總督府博物館所藏。
13、「朝鮮古蹟圖譜」三、一三二七——一三三一。また、梅原氏によれば、隣邦支那で關野博士が先年とられた寫眞中、漢時代に屬する壺の上部に獸類を鉛畫した遺品があるとのことであるが、私は未だ其の詳細を知らない。いつか博士に願うて拜見するの機會を得、諸外國の類品と共に、これら一群の比較考察を試みたいと思ふ。
14、木崎愛吉氏「安養寺銅鐸」(本誌一二ノ二)梅原末治氏「河內因幡新發見銅鐸調査報告」(民族と歷史六ノ五)「考古圖集」第十九集。
15、堀內清氏「銅鐸の新發見」(歷史地理二一ノ一)今西龍氏「但馬城崎郡氣比の銅鐸發見地」(本誌四ノ三)關田清氏「但馬國城崎郡港村大字氣比小字鷲崎踏査報告」(本誌七ノ九)其他。
16、濱田博士「一二の銅鐸及銅鉾の成分に就て」(本誌八ノ六)「京都帝國大學文學部陳列館考古圖錄」第四。
17、永井潛氏著增訂「人性論」(實業之日本社刊)。
18、桑田芳藏氏著「グントの民族心理學」(舊版)兒童の圖畫の心理に就て(四〇八頁)。
19、この格子紋は慶州發見陶壺(京大藏)にある動物の身體に施された並行斜線と同一意味のもので、體の立體的な感じをあらはすに用ひた原始的手法と見るべく、濱田博士もいはれたやうに、もし「太い筆ならば身體を一つのストロークでやる

べき所であることを暗示してゐると云へよう」（原始的繪畫と裝飾）。したがつて今「其の部（體）を覆ふた毛の狀を示してゐる處」となす梅原氏の說には贊しない。

20、濱田博士「支那古銅器研究の新資料」（國華三二ノ六）三、白色土器と象牙彫刻の項。

21、濱田博士「陝西國掖宿郡楷宿村土器包含層調査報告」（京都帝國大學文學部考古學研究報告第六册）四〇頁。

二

食物の供給方法に於て、今のオーストラリヤ人が尙も、狩獵者であり、且つ植物の摘取者であるが樣に、あらゆる高級な民族も其の原始の時代には、一度はこのやうな生產の最も根元的な二型式——廣義に於ける狩獵と植物採集——を採用してきた[1]らしい。しかし私が今考へて見ようとする畿內、特に大和の新石器時代遺跡をのこしたところの民衆は、其時すでに文化の最低階段ともいふべきSavageの時代を離れてBarbarismの域に達して居つた[2]樣であり、其の生活形式に於ても、かの大和山邊郡二階堂村岩室發見の土器片に印せられた紋[3]が示す如く、一部分はもはや農耕の生活に這入つて居つたものであると考へられる[4]が、しかし其も未だ曙の時代にすぎなかつたであらう。やはり、從來の狩獵生活——廣義に於ける——が彼等の最も重要視し、そして根元視した生產の型式として其の主たる位置を占めなければならなかつたらしい。各遺跡より發見される石鏃・石槍・石斧其他利器の夥多であることが、たとへ其の一部分は鬪爭其他に使用されたものとして考慮のうちにをくとするも、なほよく其の狩獵の狀態を物語るに足りるし、鹿、野猪[5]等獸骨の數多の出土は其の狩獵に於ける主要なる對象の何者であるかを明にする。

彼等がこの樣な生活の形式を有して居つた時代にはたとへ足を一歩農耕の生活に蹈み入れたものにとつても、狩獵が過去の日の忘れ得ぬ强い記憶として、尙其の胸臆に新なるものがあつたであらう。したがつて、其の生活の意識に於ても、また狩獵が農耕其他の何者よりも、はるかに擢んでゝゐたことに違ひない。かくの如くにして、狩獵が彼等に於ける精神勞作の大部分をしめ、且つ最も興味多い仕事であつた結果、其に關する題材について描くことが最も彼等の美的感情を滿足させるに近かつたであらうし、又其を同樣にあらはすことによつて、彼等は歐洲舊石器時代の繪畫にある樣な、一種のFetishism的宗敎的意義[6]をも感じたに相違ない。

こゝに於いて生活の特徵はまた藝術の特徵としてあらはれなければない。卽ち我が彌生式石器時代民衆の獵人生活は、此の唐古發見の彌生式土器片に見るがやうに、其處に描かれるべき繪畫の主題について、決定的な影響[7]をあたへたものである。

註

1、グローセ原著、安藤弘氏譯「藝術の始源」第三章、原始民族。

2、濱田博士「遺物遺跡から見た上代の近畿地方」（京阪文化史論）。

3、佐藤小吉氏「山邊郡二階堂村大字平等坊石器遺跡」（前出）第二十七圖土器片底部の拓影參照。但し、實物は今其の所在を明にし得ないことを遺憾とする。

4、また、朝鮮金海貝塚に於いて濱田博士一行の發見した炭化米粒塊（大正九年度朝鮮古蹟調査報告第一册、金海貝塚發掘報告）、九州筑後國八女郡長峯村大字岩崎から中山博士の發見した燒米（同博士「土器有無未詳なる石器時代遺跡」本誌一〇ノ一一）等があり、更に入木柴三郎氏著、「日本考古學」中、彌生式遺跡から燒米のであることをしるしてゐて、日鮮に

於ける農業開始の時代の何時頃であるかを想察せしめる。

5、本邦各地の彌生式遺跡から發見される鹿角、猪牙、獸骨等は其例甚だ多い。今、大和出土のものをあげるならば、高橋先生の報告された高市郡新澤村一（前出）及び山邊郡二階堂村岩室（清水寅藏氏蒐）發見の鹿齒を擧へることができる。

6、濱田博士「原始的繪畫と裝飾」（前出）。

7、安藤弘氏譯「藝術の始原」（前出）。

三

更に、この唐古から發見された土器片に左行する鹿が殘存してゐるといふことは、彌生式の石器時代民衆が追求した美の型式を考へて見ようとする私達のこゝろみにとつても、また大いなる喜でなければならないのであらう。卽ち私はこゝに殘された最後の問題として、其を見ることゝしたい。

先づ此の土器片を一瞥して、直ちに吾々の感ずる所は、其の直線を主とした幼稚な單純な形像であらう。上の鹿に於ける木の枝そのものゝ樣な角、細く長く植物の幹を思はせる首、中央鹿の同樣な木の如き首や、身體をあらはすために置かれてゐる格子紋、腹部の中央にくつゝけられたやうな不安定な前足などは、ことに其の手法や描寫の、よりよく原始的であることを示してゐる。

けれども尙ほ部分としては忘れがたい。上にある鹿の頭部の一部に於ける卒直な單純な一種の美しさは、其れについて特殊の關心をもつものゝみが把へ得る所のものでなければならない、殊に其の眼のあたりは柔く愛らしい。其はやがて子供や埴輪のもつ眼の無邪氣さでもあり、鳩の眼がもつ優しい美しさでもある。また中央にある鹿の角が示す素直な感じは、彼等の狩獵から得た深い直觀的な經驗內

第五圖

支那漢代畫象石の一部

（關野博士著書による）

容をあらはすに充分であらう。さらに其の背から臀部腹への線がやゝ柔く流れるあたりは、彼等の食時に於ける鹿肉の美味を想像せしめるに足りるし、たゞ〳〵しく篤を行つた細い脚も、たゞかの淺茅ケ原をふみ歩む際の微妙な感觸のみは遺憾なく傳へてゐる。

しかし、これら部分的な一種の特質、卽ち卒直と單純とを外にしても、尙背後に流れる情緒をすてさることができがたいであらう。これはやがて古事記の物語の精神と相接觸し、萬葉集の歌のそれと相交涉する。であるから其處には慶州皇南里發見の陶壺（第四圖）に見るが樣な甚だしい Crude なそして Grotesque な趣もなければ、支那漢代畫象石中の狩獵圖（第五圖）[3]に見るやうな堅さや思惟性もなく、勿論歐洲舊石器時代の繪畫に見るような優秀な特異性をも缺いてゐる。たゞ私達の頭に强くひゞくものは「生に對する眞實性」[2]そのものゝような、情緒をともなつた、ある種の優しさと愛らしさと柔かさのみである。

かくて、此の一小器片にあらはれたところから、美の形式とでも言ふべきものを、特に抽出することが許されてゐるとするならば、それは「直線によつて示される單純卒直味」であり、尙また流れる水や柔かな波にも比すべき一の情趣」であると言ひ得られるであらう。そして此の特質はかの彌生式土器表面の幾何學的模樣や精巧な磨製石器に於ても認め得べき所のものと同一であつて、日本藝術史上の最も興味ある序曲を形造るものであると考へたい。

こゝに若し藝術の基調をなすものが、其の心生活であるとするならば、この一小器片に映じたる彌生式石器時代民衆の精神的生活の內容も、また此の繪の示すが如き、卒直であり、單純であり、そして平和であらねばならない。

註

1、關野博士「支那出東省に於ける漢代墳墓の表飾」（東京帝國大學工科大學記要八ノ一）附圖參照。第五圖は其の第百六十五圖、濟南府金石保存所藏。嘉祥蔡氏園出土、畫象石の一部である。

2、グローセ原著、安藤弘氏譯「藝術の始源」（前出）、第七章、描寫藝術。

3、西村眞次氏「大和時代」（國民の日本史第一篇）第三章、第五節、美の追求と生の享樂。なほこの一項は、和辻哲郎氏著「日本古代文化」造形美術其他の考察に負ふ所多いのをしるしたい。

四

以上私は最近大和から發見された一個の彌生式土器片と其の表面に篦書されてゐる繪畫を紹介すると共に、其によつて生活の特徵が如何に深く藝術の特徵に交涉する所あるかを窺ひ、更にわが上代人、こゝでは主として彌生式石器時代民衆が愛好した美の形式について、貧しい考察のこゝろみを加へようとした。ひるがへつて、これを再讀すると、其の所論、刻畫の如くにたど〳〵しく、そして單純である。唯だ切に先輩諸氏の是正をまつことゝしよう。（大正十二年四月十三日稿七月二十四日補）

後藤云、本誌十三の九、梅原末治氏の「彌生式土器に鹿の圖」とある報告は、文の終に註記してある樣に、文責は全く編者たる自分にある。殊に圖解に於いては全く自分の責任であり、隨つて放れた森本氏の非難の矢は當然自分の受けねばならぬものである。

紀年銘鏡につきて（九）

廣瀨都巽

（三七）永和三年　（一三七七）**龜甲地双雀鏡**（第五十五圖）（紀年銘鏡集日二四）谷森眞男氏藏各部の手法（二四）と同式、緣幅六厘・高二分五厘・厚兩區とも三厘・徑三寸六分・質靑銅・傳世古重四十六匁、表面に『永和三年十一月日、六庄明神寶前諸願成就也』と微かに針書存し、上部に一孔を見る。文樣の表現平面的で、その鑄成纖弱と、手澤の痕なきに係はらず模糊たるは、正に踏み返しになる仕入物と視察する。であるから、この鑄作は、銘記年代當時若くば一二年前以內に係ることゝ信ずる。案ずるにこは武藏六所明神へ祈願し、その成就奉謝のため、仕入鏡を求めて、形式的懸鏡として獻げたのであらう。

（三八）康曆二年　（一三八〇）**瑞花双鳳八稜鏡**（續紀英五二）山城國神護寺藏中隆複合四葉座鈕、中線單圈、直角式高緣、幅八厘、高六分强、厚兩區とも六厘、徑八寸九分、質靑銅なるも、比較的錫分多きを見